夏祭り

時三吉

月は高く高くなき光を雲間に浮ばせ
海よりの水は(満潮に)満ち高まる
(夜)(静)に滑らか光りを鏤める
闇の中知れ
私達は生きた！
だが果してわれ〳〵は生きてゐるのだらうか？
(ドン チヤカ チヤカ チヤカ)(その)日の朝の光りと御首(もうお忘れか！！)(もう〳〵お前は！！)
今宵ダブ〳〵のように焼跡の中洲の樹蔭へ木片れで
こしらへた祠をかこんで人らざわめく夏祭り。

群れ寄る(ちり)塵が今にも危険な(緩)接つた状態で
ありつゝも
踏みゆく(この)瓦礫の原子爆弾の如くにして
さゝ銭がひらひらと落ち両や百円札であることも
みんな光り光りであるかと思わせて
光り苔と思ひなるものゝ塔
(ドン チヤカ チヤカ チヤカ)(ふと思い出す焼ドの白墨(さとん)のあの臭い！！)

今宵人々は あたかも 兵士に 行く 婚礼 ――ということ である。
楽園は 見られぬ 生々とした 表情で
女の 不思議な うすもの
男の 青白き 浴衣かけ
完了形
やしと 酔ぱらんと スリと 宣嘩を 楽場し
行くから 行くまたうの 宿すふれ合ふ ぼりん
ぞろ 行き交ふ
急ぎしんの 雪鈴のもとで 神楽は 終盤
重々しく

天の岩戸 と 幕の 開けよ

（ドンヤカ ヤヤカ ヤヤカ）

遠くうすれゆく あの日の 記憶も

（現正式）

乱れ 意志へと 想指向する

ことなく まい……

（乱れ 意志へと 指向せず
消えて まい
ゆくを あの日の 記憶）